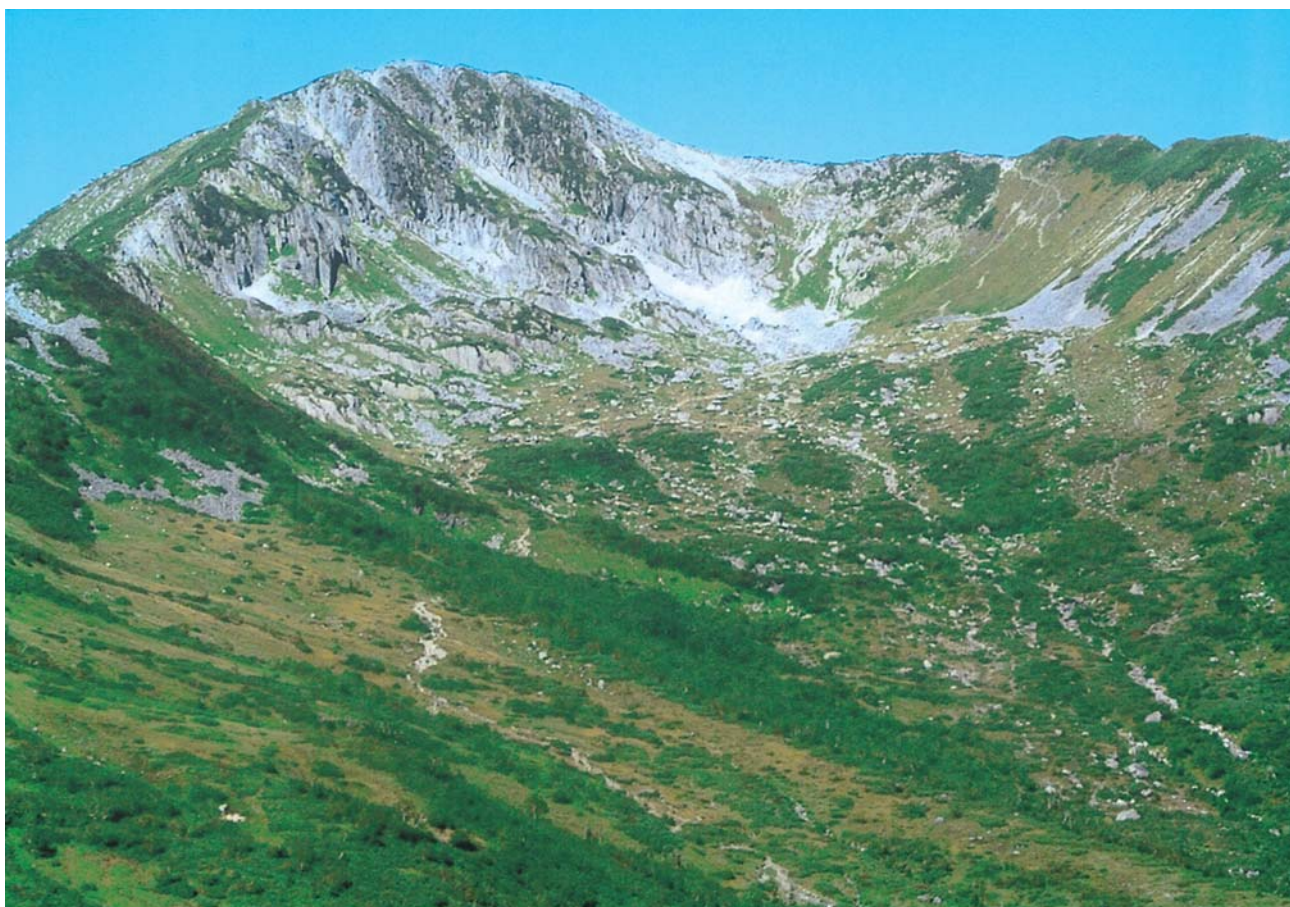


めでいかすとる
Médicastre



「黒部五郎岳とカール」

鶴岡地区医師会勉強会抄録

日時：平成26年10月28日(火) 19:00～
場所：鶴岡地区医師会館 3階講堂

『現場からの医療改革 ～庄内の医療を考える～』

東京大学医科学研究所
先端医療社会コミュニケーションシステム 社会連携研究部門
特任教授 上 昌広 先生

我が国の医療が危機に瀕している。医療提供者が不足し、医療費も足りない。政府は、医師の計画配置や在宅医療への誘導などの施策をうちだしているが、このような弥縫策では問題は解決しない。

では、我が国の医療崩壊を防ぐため、何をすればいいのだろうか？ 医療提供者を増やすことと、医療システムを循環する資金を増やすしかない。

まず、前者から議論したい。我々の推計では、現状のペースで医師を増員しても、2035年の医師の単位労働時間（100時間）あたりの死亡者数は、2010年の0.128人から2035年に0.138人へと悪化する。かつて、厚労省は「やがて医師は余る」と主張した。彼らの推計と私たちの違いは、医師の高齢化・女医の増加を考慮に入れたことだ。2010年と比較して、2035年には60才以上の医師は155%増えるが、60才以下の医師の増加率は18%に過ぎない。さらに女医の増加率は103%で、男性の34%を大きく上回る。

我が国の医師は偏在が著しい。厚労省は「医師は都会に多く、田舎に少ない」というが、これも間違いである。平成22年現在、人口1,000人当たりの医師数が最も多いのは京都府、東京（何れも2.9人）、徳島（2.8人）、福岡、高知、長崎、岡山（2.7人）と続く。逆に少ないのは、埼玉（1.4人）、茨城、千葉（1.6人）と東日本勢が占める。我が国の医師数は圧倒的な西高東低だ。

このような偏在の原因は医学部の偏在だ。確かに、関東には多くの医学部がある。東京には13もある。ところが、これを人口当たりに換算すると、違った側面が見えてくる。例えば、東京の人口は1,328万人。101万人に一つの医学部があることになる。これは、人口391万人に4つの医学部がある四国、544万人に5つの北陸、747万人に6つの中国、1,456万人に11の九州と、ほぼ同レベルだ。一方、人口4,270万人の関東には、24の医学部しかない。このうち、国公立は6つだ。関東の普通の高校生が医者になりたければ、東北地方か甲信越の医学部に行くしかない。だから、卒業すると地元に戻る。

このような医学部の偏在の背景には、明治維新以来の我が国の近代史が関係している。薩長を中心とした官軍の地元には官立大学が多く、幕府側に与した東日本には少ない。

この問題を解決すべく、東北地方に医学部を新設することが決定した。成田市や神奈川県でも議論されている。漸くまともな議論が始まった。

次に医療システムを循環する資金を如何に増やすかに関して議論したい。私は、患者保護の美名のもと、もはや不要となった規制を撤廃すべきだと考えている。特に混合診療の規制緩和は重要だ。

金の話をすると、医療界は税金・保険料の負担を増やすことに熱心だ。しかしながら、このやり方には期待できない。09年の政権交代を見

ればいい。民主党は従来から医療を重視しており、大幅に医療費を増やすことを公約に掲げていた。確かに、政権交代直後の予算編成・診療報酬改訂では10年ぶりに診療報酬を引き上げた。リーマンショック後の財政難を考慮すれば、よくやったと思う。しかしながら、民主党の「大盤振る舞い」は続かなかった。次の診療報酬改定ではトーンダウンした。また、自民党への政権交代後は、アベノミクスによる好景気のなか、診療報酬は削減された。

結局、医療システムを維持するには、国民負担を増やすと共に、税・保険料以外の財源を求めざるを得ない。高齢者の窓口負担を二割に増やそうとしているのは、この意味で合理的だ。ただ、これだけでは足りない。

この点で混合診療は魅力的だ。運用次第で、患者の選択肢を増やす手段になりうる。また、

混合診療は、医療レベルの向上に寄与する可能性がある。例えば、わが国の不妊治療が世界最高水準なのは、健康保険が適用されないため、医療機関が独自に価格を設定できるからだ。患者満足度を上げれば価格に転嫁できるし、収益を増大すれば最新機器を購入し、専門スタッフも雇用できる。最近では不妊治療の専門医が増え、医療機関間の競争を通じてサービス内容・料金が多様化した。また、多くの医療機関で、出産・人間ドック、美容整形が稼ぎ頭だ。診療報酬を低く抑えられているため、健康保険でカバーされる医療の発展が停滞し、自費診療分野が成長しているのは皮肉だ。

混合診療が機能するか否かは、医療提供者の自律に委ねられている側面が強い。先入観なく議論すべきである。

観楓会、米寿・喜寿のお祝い

日時：平成26年10月24日(金) 19：00～
場所：ベルナール鶴岡

真っ青な空に色づいてきた紅葉が美しく映え、秋晴れの一日となった10月24日、ベルナール鶴岡にて観楓会、米寿・喜寿会員の祝賀会が開催されました。

小野俊孝先生の司会進行のもと、三原会長の挨拶につづき、来賓の山形県医師会副会長中目千之先生、酒田地区医師会十全堂副会長阿部正和先生からご挨拶をいただきました。

次に三原会長から米寿を迎えられました犬塚信先生、五十嵐博之先生、今野裕先生、中里敬先生、和田満先生、喜寿を迎えられました木根淵清志先生、富田晋吾先生、長島義弘先生、小野寺俊直先生、丸谷紘一先生のご紹介とご出席いただきました先生方に賀詞・記念品の贈呈が行われました。

続いて、ご出席されました4名の先生方よりひとことご挨拶がありましたが、「光陰矢のごとし、美少年だった私もあっと驚くタメゴロー…」(わかるかな?)などとユーモアたっぷりの話に会場は笑いの渦に包まれ、福原副会長の乾杯のご発声で賑やかに宴は始まりました。今年の出席者は来賓6名、米寿会員1名、喜寿会員3名、会員・ご家族34名、職員10名の総勢54名でした。来年も、より一層賑やかで楽しい会になるよう、また、米寿・喜寿会員の先生方をお祝いするためにも会員の先生方から多数ご出席いただければと思います。もう少し懇親の時間がほしいくらい宴もたけなわの中、土田副会長の若い頃のエピソードを聞きながら閉会いたしました。

教務課 宮崎 純子



ご出席いただいた先生



犬塚 信 先生



木根淵清志 先生



富田晋吾 先生



長島義弘 先生





日時：平成26年10月5日(日)
場所：いろり火の里 なの花ホール

緩和ケア市民公開講座

庄内プロジェクト
渡部 忠

去る平成26年10月5日(日)南庄内緩和ケア推進協議会主催による緩和ケア普及のための市民公開講座が、三川町「いろり火の里 なの花ホール」にて開催されました。

台風18号が接近するなか、庄内一円から255名の方々にご来場いただきました。

テーマ「命はそんなにやわじゃない2」

- 講演「緩和ケアについて」
庄内病院 鈴木 聡 先生
- トーク&ライブ
「命はそんなにやわじゃない」
シンガーソングライター
杉浦 貴之さん

は、「自分もがん患者の一人として、勇気を頂きました。」「緩和ケアは、患者として安心できることだと思います。心に希望をもって生活できるよう、治った人に会ったりできるこの企画を続けていただきたい。」「がんになったら諦める、そんな必要がないことを今日知りました。命はやわじゃない、そう思いたい!!」と、いう感想もいただきました。

終了後、杉浦さんの書籍販売コーナーには長蛇の列ができ反響の大きさを実感しました。



緩和ケア市民公開講座は、庄内プロジェクトに参加するすべての皆様のご協力により盛会に終えることができました。スタッフとしてお手伝いいただきました皆様にも、厚くお礼申し上げます。



今回の公開講座は初めての会場であり、スタッフにとっては新鮮な気持ちでした。

トーク&ライブには、前年に引き続きがんサバイバーとして、势力的に活動をしている杉浦貴之さんより出演いただきました。

杉浦さんのライブは、ユーモアを交えたトーク、自身の経験から作詞された歌、がん患者さん達で参加したホノルルマラソンの映像などで構成され、会場は笑いと涙と感動に包まれました。

終了後、提出いただいたアンケート結果に



マイペット&マイホビー

— 第 92 回 —

茶碗と私

鶴岡協立病院 堀内 隆三

若いころは時間も金もなく、趣味とは縁がない生活を送っていた。

しかし20年ほど前、ある縁で天狗森という山奥に住む岡三男という画家に出会った。彼は、厳冬も深い雪に埋もれながら一人で絵を描き続ける孤高の画家である。初めて対面した時は、余りの強烈な個性に押しつぶされ、すっかり萎縮してしまった。しかし、何度か画伯の美術館に足を運ぶうち、画伯の温かみ分かるようになった。そして、古唐津茶碗で点てくれる抹茶を美味しく頂けるようになった。画伯は、絵画ばかりではなく茶の湯や骨董にも造詣が深い。いつしか、導かれるようにして茶の湯・骨董の世界に遊ぶようになった。彼は、私の力量を見極めながら、茶碗との出会いの場を用意してくれた。小遣いと相談しながら、道具をそろえるのであまり高い買い物はできない。高くないといっても、道具を求めるときは真剣勝負である。私は、道具を買い自分の手に入れることを“道具を喰う”と呼んでいる。どれだけ本を読み美術館に通っても、鑑賞するだけでは道具のことは分らない。道具を自分で買い求め、実際に茶席で使ってみなければ分らないのである。道具を手に入れることができるのは、三つの条件が揃ったときである。まずは道具に出会うチャンスに恵まれること、次にその価値を認める目を持っていること、そして最後にそれを手に入れる小遣いを持っていることである。実際に三つが揃うことは稀で、どれほど多くの茶碗が、いたずらに目の前を通り過ぎて

いったことであろう。しかし、性懲りもなく、画伯に『古い瀬戸黒茶碗を探して欲しい』と、お願いしている。運よく出会えたときには、残りの二つが揃っているのであろうか、楽しいやら怖いやらである。

茶の湯で使われる茶碗には、『唐物』、『高麗・安南（ベトナム）物』、『和物』などがある。唐物は、青磁に代表されるように、精緻で、鋭く、歪みがなく、完器そのものである。古い唐物茶碗は高価すぎて、私には手が出ない。『高麗・安南（ベトナム）物』はやや厚手で、形が歪み、絵付け大胆で、釉薬が滲んでいることもある。茶の湯のために作られていないことが多いが、豪快さと素朴さで、昔から茶人に愛されてきた。『和物』は最初から茶の湯で用いられるよう造られているので、手に取って心地よく、口当たりも実に滑らかである。しかし、作者の意図が強すぎて、それが煩わしく感じることもある。もっとも、大きなことが言える資格など、私にあらう筈もない。

私の愛する茶碗を三つ紹介したい。



「早乙女」

一つは画伯から初めて求めた茶碗である。青磁釉に辰砂が掛かっているが発色が悪い。それがかえって落ち着いた色合となり、代掻きを終えた田圃に似ている。これに茶を点てると、田植えが終わった田圃に早変わりする。私は『早乙女』と銘を付けた。ポケットに入るほど小振りなので、茶籠に仕組み、旅行鞆に忍ばせ外国での茶も楽しんでいる。これが最後と覚悟した親の病室の枕元で茶を点てたこともある。人生の忘れられない場面で、いつも佇んでいるのがこの茶碗である。



「寝覚」

次は“小田原三茶人”の一人、野崎幻庵が造った本阿弥光悦写しの伊賀茶碗である。見込み（茶碗の底）に伊賀独特のビードロ釉が溜まっており、銘を『寝覚』という。木曾川に川底がエメラルドグリーンに光る『寝覚ノ床』と呼ばれる場所がある。『旅に出た浦島太郎がここへたどり着き、川底のあまりの美しさについて竜宮城を思い出し、玉手箱を開いてしまう。途端に白髪の翁に変化し、まるで夢を見ていたかのように目が覚めた』という伝説が伝わっている。茶碗の銘は、ビードロ釉が『寝覚ノ床』のエメラルドグリーンに似ていることから来ているようだ。昨年、80歳を超える茶人を訪ねて鎌倉まで行った。彼は表千家の不審庵と寸分違わぬ茶室を建て、北大路魯山人、荒川豊蔵、桃山志野の茶碗や、室町時代の茶釜など多数所持

し、奥方と茶三昧の隠遁生活を楽しまれている。老茶人は高橋箒庵所持の桃山・志野茶碗で茶をご馳走してくれた。私はリュックに入れて持参したこの茶碗『寝覚』で返礼の茶を点てた。一瞬にして茶人同士が心を通じ合えた、忘れられない貴重な経験である。



「呉器茶碗」

最後は、妻の祖母が残してくれた高麗の呉器茶碗である。呉器茶碗は祭器といわれるだけあって、さすがの風格がある。すわりが良くスッキリとした造形で、釉薬を掛けたときの指痕が飛び石となって巧まざる景色を造っている。妻の祖母は戦争を潜り抜け103歳まで茶の湯を極めた人である。彼女が残した道具はいずれも力強く厳しいものばかりだ。波瀾に富んだ人生を逞しく生きた彼女の姿そのものである。昨年、私は還暦を迎え、記念の還暦茶会を開いた。その際、この茶碗を使わせてもらった。後ろから義祖母にじっと見つめられているようで、背筋を伸ばされる自分がいた。

“良い茶碗を欲しい”と欲するのは、まさしく煩惱である。しかし、煩惱こそが私の生きるエネルギーである。そして、時代を超え、茶の湯の達人たちに通じるエネルギーでもある。煩惱にまみれながら、茶の湯の達人たちに出会えることを、これからも楽しみにしていきたい。

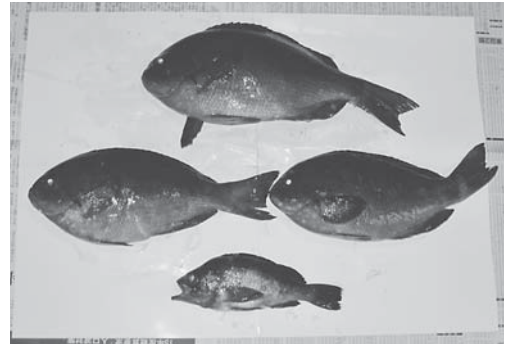
日時：平成26年10月26日(日)
場所：日本海一円

平成26年度秋季医師会釣り大会の結果

つり同好会会長 佐藤 洋司

10月26日、鶴岡地区医師会秋季釣り大会が行われました。ずっと週末は台風などで海もあれていましたが、久しぶりにこの数日好天が続き、いわゆる釣り日和でした。参加者は少なめでしたが、今年は久しぶりに大物が釣れて優勝をさらっていきました。

私事ですが、夏に腰の手術を受けたため、静養のため釣り大会出席禁止令が出たため表彰式、懇親会の出席となりました。それでは結果をお知らせします。



(敬称略)

優 勝	菅原 翼	大 物 賞	菅原 翼 (メジナ 38cm)
二 位	佐竹 清紀	小 物 賞	佐竹 清紀 (アジ 52匹)
三 位	佐藤 元昭	外 道 賞	吉住 忠 (ドゴ 22cm)
B B	下山 信夫	五 目 賞	宮崎 健志 (5種類)
B M	齋藤 高志	ラッキー7	岩根 広和



今年の秋季医師会釣り大会に参加して

菅原 翼

10月26日に恒例の医師会釣り大会が日本海一円にて行われました。参加人数は、14名でした。北は酒田、南は鼠ヶ関と各自好きなポイントで釣りをしたようでした。医師会職員の参加は4名で全員大物釣りをしました。昨年に比べ天候に恵まれ、少し波があり条件はとても良い状態でした。

私たちは、いつも行く場所でもある温海方面の磯場に向かいました。休みの日と天候にも恵まれたせいか、前日、夜中からたくさんの釣り人で賑わっており、私の立ちたい磯場に立てるかどうか心配でした。行ってみると先客がいました…。それぞれ、空いている場所に立って釣りを始めました。

私は、先客の方に隣に立って良いか聞いて、狙っていたポイント近くに幸いに竿を出すことができました。(隣の方は、岩手県から来た方でした)

私の釣りスタイルは庄内中通し法で、普段から夜釣りで成果を出しているので今大会も暗いうちに釣りをしよう決めていました。期待の第1投、あたりも分からないうちに餌がなく、豆ふぐ、豆鰯、クロコ(メジナの幼少期)、ウマがたくさんいて釣りにならないくらい餌取りの猛襲に会いました。この状態、かれこれ約1時間半……。

餌が残るなぁと思っていたら、すぐにあたりが…。竿を伝って手元に感じる感触が、ふぐのあたりではない!!! やっと…『きたぁ～☆』竿をグッとあわせると竿が半月に曲がり、獲物(魚)が底の方にささります。もしや、黒鯛!? でも、そこまで引かないな～だいたい30cm位かなと思いつつタモですくうと、あれ!? メジナだ! 大物が釣れたので幸先良いスタートでした。10分後、また、あたりがきました。今度は先ほどとは違い、大物です。引きが強く、ドラグを効かせながらも糸がどんどん出ていくので竿を少し立てた途端、糸が切れてしまいバラしてしまいました。バラしてしまうと釣れなくなることがあるのでテンションが低めでしたが、約15分後、きました! あのあたりきました!! またもや、強い引きで今度はうまく釣りあげることができました。約40cm。(←この時釣りあげたのが、大会で大物賞になりました。)

続いて、10分後にもう1枚、計3枚のメジナ(グレ)を釣り上げることができました。午後3時半前には、参加者が医師会館に集合してきたので、早速計量を開始しました。みなさん数も釣れており、魚種も様々でした。

今年に入って、釣りをするのが久しぶりだったので、大物が釣れてほっとしました。また、参加者の事故、怪我等なくみなさん無事に計量に来られ、表彰式・反省会を迎えられてよかったです。

* 鶴岡地区休日夜間診療協議会からのお知らせ *

採用要望薬品・処置材料について、鶴岡地区休日夜間診療協議会理事会で協議の結果、以下のように決定しました。

1. メプチンミニ 25 μ g錠、メプチン 50 μ g錠 採用
2. 外用抗真菌薬 不採用
3. カルトスタット (バラ売り業者より購入し) 2枚を常備

新入会員の紹介



氏 名: 三 井 直 弥

生年月日: 昭和43年2月1日

生まれた所・育った所: 山形県鶴岡市

勤務先・診療科目: 三井病院 小児科

出身校: 獨協医科大学

趣味・特技: 食べ歩き?

鶴岡地区医師会会員の皆さんへ一言: 不勉強な点が多々ありますが、
よろしく願います。

表紙

「黒部五郎岳とカール」

齋藤 壽一

9月中旬の山行で、北アルプスへ行ってきた。連日の好天で、念願の黒部源流にある黒部五郎小屋まで20年振りに登った。体力の問題でピークは断念したが、黒部五郎岳の大きな山容と美しいカールを存分に楽しんだ。

編集後記

今年も、あと1ヵ月半となりました。朝晩の冷え込みで、すっかり初冬の季節となりましたが、山形市内でのインフルエンザ発生の報告を、随分早い時期だと思っているうちに、鶴岡地区でもインフルエンザに罹患した方たちが多数報告されています。昨年とはかなり異なっている様子ですが、皆様、予防接種はお済みでしょうか。

観楓会では、10名の先生方の米寿・喜寿を祝いました。戦中・戦後の大変な時期に青春時代を過ごされ、昭和と共に働いていらした先生方です。いつまでもお元気で、ご活躍されることをご祈念申し上げます。

今年度最後の医師会勉強会の講師をお務めいただいたのは、東大医科学研究所特任教授の上 昌広先生でした。マスコミにも度々登場される著名な先生が、庄内の医療の今後について具体的にお示しいただいた講演内容は、とても興味深いものでした。その後、先生の発行する医療ガバナンス学会のメールマガジンを配信していただき、医療情報発信のひとつの形態を見ることができたのも、良い経験となっています。ご興味のある方は、ご覧になってみてください。

また、来年度の医師会勉強会も、少しずつ準備をしています。興味を持っていただけそうな内容を考えておりますが、講師の推薦など、情報をお持ちの方は、是非、お知らせください。

(福原 晶子)

編集委員：三浦 道治・福原 晶子・三科 武・齋藤 高志・中村 秀幸・伊藤 茂彦

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jpホームページにも掲載しております  URL <http://www.tsuruoka-med.jp>